

ウナギ産卵場生態調査

VI. ウナギ人工仔魚の洋上飼育の試み—①成長—

°神保忠雄・加治俊二（水研セ南伊豆セ）・橋本 博（水研セ志布志セ）・
望岡典隆（九大院農）・張 成年・黒木洋明・高橋正和（水研セ中央水研）

【目的】近年、人工的に得たウナギ受精卵からシラスウナギまでの飼育が可能となったが、現状の飼育方法は実験段階にあり、量産に向けてさらなる飼育技術の開発が必要である。天然ウナギ仔魚の生息域である外洋水の質は、沿岸水とは大きく異なることが知られているが、これまでに外洋水を用いたウナギ仔魚の飼育は検討されていない。そこで、人工的に得たウナギ仔魚を用いて外洋水での飼育を試み、通常飼育した同一群仔魚と生残及び成長等の違いについて比較検討した。

【方法】南伊豆栽培漁業センターで飼育していた日齢の異なる3群のウナギ仔魚を供試した。水産庁調査船開洋丸に持ち込んで外洋水による飼育を試みた区（外洋飼育区1～3群）と、同センターで通常飼育を継続した区（通常飼育区1～3群）に分けて比較飼育を行った。洋上飼育区の飼育海水には、水深3mから採水した外洋水を約25℃に調整し、0.45μmのフィルターでろ過したものを使用した。その他の飼育方法は従来のウナギ飼育方法に準じ、16～20日間の給餌飼育を行った。実験終了時に生残したウナギ仔魚を固定した後に、生残尾数の計数と体測定を行った。

【結果】実験開始時のウナギ仔魚の日齢と平均全長は、1群が日齢6、6.7mm、2群が日齢9、7.2mm、3群が日齢30、13.5mmで、それぞれ日齢22、29、50まで給餌飼育を行った。その結果、両区の生残率は、1群では洋上飼育区の70.6%に対し通常飼育区が75.4%、同様に2群では22.6%に対し10.3%、3群では67.5%に対し80.0%であった。同じく平均全長は、1群では10.1mmに対し11.1mm、2群では10.4mmに対し10.2mm、3群では15.7mmに対し15.6mmであった。以上のように、両区の生残及び成長に大きな差は見られず、外洋水による飼育で飼育成績の向上は認められなかったものの、調査船上での飼育が十分に可能であることが確認できた。